

黙示録7章「患難における救い」

1A 神のしもべたちへの印 1-8

1B 災害を押しとどめられる御使いたち 1-3

2B 十四万四千人のイスラエル人たち 4-8

2A 御座の前に立つ者たち 9-17

1B すべての国民からの大群衆 9-12

2B 大患難を経てきた者たち 13-17

本文

黙示録 7 章を学びます。私たちは、6 章から、子羊によって地上に神の御怒りが下っているところを見て行っています。主イエスは、父なる神から、世界の土地権利書である巻物を受け取られました。そして、封印を解き始めました。初めが、白い馬、偽の平和の使者の現れです。彼が平和の装いをして世を救う政治指導者として現れますが、その後、赤い馬、すなわち戦争が起こります。その次に、黒い馬、インフレが起こります。そして青ざめた馬、これが死を表していて、剣だけでなく、飢餓、死病と野の獣によって、なんと地の四分の一の人が死にます。こうして、患難の時代が始まります。ダニエル書 9 章によれば、それは、主の定められた七十週のうち、最後の一周、七年間になります。

そして第五の封印をもう一度、見てください。6 章 9 節から 11 節です。「⁹子羊が第五の封印を解いたとき、私は、神のことばと、自分たちが立てた証しのゆえに殺された者たちのたましいが、祭壇の下にいるのを見た。¹⁰ 彼らは大声で叫んだ。「聖なるまことの主よ。いつまでさばきを行わず、地に住む者たちに私たちの血の復讐をなさらないのですか。」患難の時代には、先に話した患難に加えて、キリストを信じる者たちが殉教することになります。イエスも、オリーブ山で、弟子たちに世の終わりについて語られた時、戦争が起こるのは産みの苦しみの始まりで、あなたがたは、わたしのゆえに、すべての人から憎まれると警告されていました。

しかし、続けて、こう言われるのです。「マタ 24:14 御国のこの福音は全世界に宣べ伝えられて、すべての民族に証しされ、それから終わりが来ます。」次々と患難が起こりますが、それでも人々が救われて、その信仰のゆえに殉教しますが、それでも、御国の福音が全世界に宣べ伝えられていくのです。主が、アブラハムにかつて約束された、「地のすべての部族は、あなたによって祝福される(創世 12:3)」ということばが、キリストによって弟子たちに命じられて、「あらゆる国の人々を弟子としなさい。(マタ 28:30)」となりました。そして、それが患難の時代にも続き、その恐ろしい神の御怒りの現れの時にも、神ご自身は人々を憐れんで、最後の最後まで人をお救いになります。

黙示録 7 章は、そうした患難の中にあっても、神があらゆる国や民族、部族から人々をお救いになる幻を見ることができます。ところで、黙示録は、このように恐ろしい災いが下る幻の次には、天における慰めと安息の幻があり、これらが交互に続きます。私たちの時代にも、恐ろしい出来事が起こっていながら、それでも、その中で主の救いの御業が今までになく起こって来る、ということを見ます。それが、教会が天に引き上げられた後の患難の時であっても、その最悪の患難においても、神はご自身の憐れみを捨てておられず、救いの手を差し伸べておられます。

1A 神のしもべたちへの印 1-8

1B 災害を押しとどめられる御使いたち 1-3

¹ その後、私は四人の御使いを見た。彼らは地の四隅に立ち、地の四方の風をしっかりと押さえて、地にも海にもどんな木にも吹きつけないようにしていた。² また私は、もう一人の御使いが、日の昇る方から、生ける神の印を持って上って来るのを見た。彼は、地にも海にも害を加えることを許された四人の御使いたちに、大声で叫んだ。

四人の御使いです。地と海にも、木にも風を吹き付けないようにしていましたが、主からの号令が出れば、その抑えを解いて、災いが下ります。「四方の風」とありますが、かつてのエジプトに対する十の災いで、イナゴの襲撃は風によるものでした。ここでは、風そのものよりも、そのもたらす災いの力なのだと思います。

おそらく、その災いが次の 8 章でしょう。子羊が、第七の封印を解くと、七つのラッパが吹き鳴らされます。初めの四つが、天地に対する災いです。木の三分の一が焼け、海の三分の一が血となり、地上では川の水が汚染されます。そして、実はこれらの災いを御使いたちが引き止めているということです。私たちは、安定した天候に恵まれています。ここ数年、不安定な気候が続いていますが、黙示録に啓示されている災いに比べれば無に等しいです。それは主が敢えてそうされているからであって、いつでもその引き止めをなくして、災いを下すことができるのです。

ところで、「**彼らは地の四隅に立ち**」という表現から、聖書は、地球が平らだと教えているのか？という人たちがいます。いいえ、これは生活の実感にそって表現しているのであって、日の出とか、日没とか言っても、太陽が出ているのではなく、地球が周っているかに他なりません。でも、生活の実感で、日が地平線から出ているのです。

それから、この四人の御使いに命じている、彼らの上の位にいる、もう一人の御使いは、「**日の昇る方**」から来ています。聖書では、多くの災いが東から来ています。今、言及した、イナゴの大群は、東からの風でした。ヨナも、彼の日よけとなっていた、唐胡麻が枯れてしまったのは、東からの風でした。そして黙示録では、9 章 14 節で、ユーフラテス川のほとりに四人の御使いがつながられていることが書かれています。イスラエルから見て、ユーフラテス川は東方です。16 章に同じく

ユーフラテス川に鉢を御使いがぶちまけまして、日の昇る方から王たちがやってくるのが預言されています。こうして、日の昇る方から、災いをもたらす御使いが待機している中で、それを統括しているような御使いなのでしょうか、「ちょっと待って」と号令をかけているように見えます。

³「私たちが神のしもべたちの額に印を押してしまうまで、地にも海にも木にも害を加えてはいけません。」

午前礼拝で、このことを詳しくお話ししました。神の印は、彼らを災いから守るものです。彼らは、14章によると、イエスが再臨されてエルサレムに立つ時まで生き残り、守られています。途中で、悪霊どものサソリの毒のようなもので、人々は苦しみますが、彼らは守られます。

ところで、この印について、悪魔も対抗します。キリストに対して、偽キリストを立てて対抗しますが、印も、13章を見ると、獣の刻印を額と右手に受けさせて対抗するのです。印を受けることによって、自分がだれのものになるかが決まります。神の印であれば、その人は神のものになり、神のしもべです。獣であれば、獣の所有になり、獣のしもべになります。どのような印を受けているのかが、黙示録の中で重要視されています。天のエルサレムでは、神のしもべたちに、その額に神の御名が記されています(22:4)。

2B 十四万四千人のイスラエル人たち 4-8

⁴ 私は、印を押された者たちの数を耳にした。それは十四万四千人で、イスラエルの子らのあらゆる部族の者が印を押されていた。⁵ ユダ族から一万二千人が印を押され、ルベン族から一万二千人、ガド族から一万二千人、⁶ アシェル族から一万二千人、ナフタリ族から一万二千人、マナセ族から一万二千人、⁷ シメオン族から一万二千人、レビ族から一万二千人、イッサカル族から一万二千人、⁸ ゼブルン族から一万二千人、ヨセフ族から一万二千人、ベニヤミン族から一万二千人が印を押されていた。

ここに、印を押された人々がだれであるか、ヨハネは、はっきりと書き記しています。「イスラエルの子らのあらゆる部族の者」です。そして各部族一万二千人が、印を押されていて、十二部族なので十四万四千人です。ここで、この意味はいったい何のか？という議論が出てきます。そして、「文字通りのイスラエルではない。」と言うのです！「これは、教会を表している」とか言います。また異端の団体が好んで自分たちに当てはめますね。有名なのはエホバの証人です。

しかし、どうやったらこれが、自分たちのことだと読めるのでしょうか？一定の国語力を持っている人が、小学校五年生の子が、ここの箇所を読んだら、どのように受け止めるのでしょうか？「イスラエルの子らのあらゆる部族の者」は、「イスラエルの子らのあらゆる部族の者」ではないでしょうか？朝、挨拶をする時に「おはようございます」と言って、「おはよう、って、何を言っているのです

か？」と問い詰められたら、困りますね？おはようは、おはようだからです。同じように、主が語られている時に、主がことさらに隠された意味を抱いておられるわけではありません。そのまま読んで、そのまま受け取めるのです。比喻であれば、比喻であることが、大抵、自ずと分かります。

私たちが、患難の時代を考える時に忘れてはいけないのは、神の救いの全体のご計画です。それは、イスラエルを神が初めに選ばれて、彼らによってすべての人が祝福を受けるようにされました。イスラエルからキリストが現れ、キリストにあって救われます。しかし、それはイスラエルを退けたのではなく、残りの者、イエスを信じるユダヤ人をいつも残しておられ、ついに最後には、イスラエルを回復させて、救いを完成されるのです。「ローマ 11:25b-26 イスラエル人の一部が頑なになったのは異邦人の満ちる時が来るまでであり、26 こうして、イスラエルはみな救われるのです。「救い出す者がシオンから現れ、ヤコブから不敬虔を除き去る。」

イスラエルにとって、患難時代は、メシアが来られるにあたっての試練の時です。「エレ 30:7 わざわいだ。実にその日は大いなる日、比べようもない日。それはヤコブには苦難の時。だが、彼はそこから救われる。」この患難によって、彼らが救い主の到来を祈るようになります。その祈りに答えて、主が戻ってこられるのです。主は、その贖いの初めに、十四万四千人をご自分のしもべとして選ばれます。再臨の時にその贖いを完成されます。「彼らは、神と子羊に献げられる初穂として、人々の中から贖い出されたのである。(14:4)」

十二部族の各部族が、それぞれ一万二千人います。ここで気づくことは、一部族が抜けてしまっていることです。ダン部族がいません。実は、このことは今に始まったことではなく、イスラエル十二部族が始まって以来起こっていることです。ヤコブに 12 人の息子が生まれました。その中の一人がヨセフですが、彼は兄たちによってエジプトに売られてしまいました。けれども主が彼とともにおられ、ヨセフはファラオの次に権力を持つ支配者となりました。そこで彼は二人の息子を生ましました。マナセとエフライムです。ヤコブは晩年二人に手を置いて、祝福しました。これは、ヨセフの息子がそのままヤコブの息子としての相続を受けるという意味です。ですから、ヨセフから二部族が出てきました。マナセ族とエフライム族です。ですから、合計すると 13 部族なのです。

けれども面白いことに、イスラエルの部族がすべて列挙されているときは、必ず 12 部族だけが列挙されます。そこでどこかの部族が、ここ黙示録 7 章にあるように省略されているのです。ある時はシメオン族が抜けています(申命記 33 章)。ここでの目的は、「十二」というイスラエル共同体のまとまりを残しておくためです。ここではあたかも、ダン族が退けられたように見えますが、エゼキエル書 48 章にはダンへの割り当て地があります。

実はこれは、新約聖書の使徒の働きにおいても同じことが言えます。イスカリオテのユダが自殺した後、ペテロが、くじを引かせて、マツティアを加えたので使徒が 12 人になりました。ところが、

後にパウロが復活にイエスに会い、彼は他の十二使徒と同じような権威が与えられています。ですから、十三人になっています。けれども、十二使徒なのです。

このことはおそらく、十二という数字が何らかの意味を持っているからであろうと考えられます。この数字は「統治」を表しており、神の統治を象徴しているのではないかと思います。ですから、各部族の人数も、ここでは1万2千人と12の数字であり、1万2千人が12部族あるということで、神が支配されている、しもべたちを強調しています。

2A 御座の前に立つ者たち 9-17

1B すべての国民からの大群衆 9-12

⁹ その後、私は見た。すると見よ。すべての国民、部族、民族、言語から、だれも数えきれないほどの大勢の群衆が御座の前と子羊の前に立ち、白い衣を身にまとい、手になつめ椰子の枝を持っていた。

ヨハネは、黙示録の冒頭で「自分が見たすべてのことを証した(1:2)」と言った通り、「私は見た」と言って、書き記しています。それが、なんと「すべての国民、部族、民族、言語から、だれも数えきれないほどの大勢の群衆」の姿なのです。御座の前と子羊の前に立っていますから、天の御座の情景です。

先に話しましたように、主がアブラハムに、「地のすべての部族は、あなたによって祝福される。」と話していました。アブラハムの子孫によって、すべての部族に対する祝福の約束をしておられたのです。主は、元々、すべての人に祝福を願っておられました。アダムの子孫によって呪いがもたらされました。そして、アブラハムを召し出して、それからご自分のすべての民に対する救いをご計画されていました。そしてもちろん、そのアブラハムの子孫とはイスラエルの国民であります。そのキリストがすべての部族に祝福をもたらされるのです。

初めの1節から8節において、イスラエル人の神のしもべが神の印を押されましたが、おそらくは、彼らの宣教の働きにとって、これらの人々が信仰を持つのではないかと思います。教会は、神の御怒りから救い出されるために、天から降りて来られたキリストによって引き上げられています。しかし、元々、ユダヤ人が良い知らせを携えて世界の人々に伝えていくように神は考えておられたわけです。聖霊が降った弟子たちはみな、ユダヤ人でした。そして初めにエルサレムで悔い改めたのもユダヤ人であり、ユダヤ人たちが他の地方に行って福音を伝えたのです。

教会が地上になくとも、彼らが広げていくことは何ら不思議ではありません。イザヤがこのことを預言していました。「66:19 わたしは彼らの中にしるしを置き、彼らのうちの逃れた者たちを諸国に遣わす。すなわち、タルシシュ、プル、弓を引く者ルデ、トバル、ヤワン、そして、わたしのう

わさを聞いたことも、わたしの栄光を見たこともない遠い島々に。彼らはわたしの栄光を諸国の民に告げ知らせる。」ユダヤ人は、元々、世界に散らされている離散の民です。少なくとも世界には今、80 カ国以上に住んでいます。そして彼らは、住んでいる国の言語も話せません。彼らに神の印が押される人々が出てくれば、速やかに福音を伝えることができると想像できます。

そして、その群衆が今、天にいます。彼らは自然死によって天に入れられたのではありません。殉教です。14 節に出て来ます。「この人たちは大きな患難を経てきた者たちで、その衣を洗い、子羊の血で白くしたのです。」とあります。6 章において、第五の封印を子羊が解いたら、祭壇の下にいた魂がいました。「6:9-11 子羊が第五の封印を解いたとき、私は、神のことばと、自分たちが立てた証しのゆえに殺された者たちのたましいが、祭壇の下にいるのを見た。彼らは大声で叫んだ。「聖なるまことの主よ。いつまでさばきを行わず、地に住む者たちに私たちの血の復讐をなさらないのですか。」すると、彼ら一人ひとりに白い衣が与えられた。そして、彼らのしもべ仲間と、彼らと同じように殺されようとしている兄弟たちの数が満ちるまで、もうしばらくの間、休んでいるように言い渡された。」これらの人々が、今、天にいます。無数の、数えきれない大群衆です。

そして「御座の前と子羊の前」とあります。彼らは今、天の御座の前にはいるのですが、今、そこに立つことができているのです！これは、大きな恵みです。思い出してください、6 章において、地上においては子羊の御怒りを見て、もう耐えられない、そこに立つことはできない！と叫んでいる者たちの姿がありましたね。「6:16-17 そして、山々や岩に向かって言った。「私たちの上に崩れ落ちて、御座に着いておられる方の御顔と、子羊の御怒りから私たちを隠してくれ。神と子羊の御怒りの、大いなる日が来たからだ。だれがそれに耐えられよう。」しかし、こここの天の大群衆は、同じ御座なのに、そこに大胆に立つことができ、そして恐怖ではなく、反対に、慰めと救いの中で喜んでいるのです。

そして、私たちも、この大いなる恵みに入れられました。「ロマ 5:1-2 こうして、私たちは信仰によって義と認められたので、私たちの主イエス・キリストによって、神との平和を持っています。このキリストによって私たちは、信仰によって、今立っているこの恵みに導き入れられました。そして、神の栄光にあずかる望みを喜んでいます。」

¹⁰ 彼らは大声で叫んだ。「救いは、御座に着いておられる私たちの神と、子羊にある。」

彼らは、肉体においては殺されました。しかし、彼らの救いは、そういった肉体の命にありませんでした。神と子羊の中にあります。イエスも弟子たちに、言われましたね。「ルカ 12:4-5 わたしの友であるあなたがたに言います。からだを殺しても、その後はもう何もできない者たちを恐れてはいけません。恐れなければならない方を、あなたがたに教えてあげましょう。殺した後で、ゲヘナに投げ込む権威を持っておられる方を恐れなさい。そうです。あなたがたに言います。この方を

恐れなさい。」私たち人間は、いろいろなものに救いを求めます。しかし、彼らは、神と子羊にこそ救いがあると叫んでいるのです。

¹¹ 御使いたちはみな、御座と長老たちと四つの生き物の周りに立っていたが、御座の前にひれ伏し、神を礼拝して言った。¹²「アーメン。賛美と栄光と知恵と 感謝と誉れと力と勢いが、私たちの神に 世々限りなくあるように。アーメン。」

御座には、その回りに 24 人の長老たちがいたことを思い出してください。それから、四つの生き物、おそらくケルビムがいましたね。そして、さらに周りには無数の御使いがいました(5:11)。今、これだけの大群衆が主に対して救いを喜んでいたので、無数の御使いたちも、神の前にひれ伏して賛美しました。

御使いたちにとって、神のご計画とその奥義が明らかにされるのに、大きな喜びと驚きを持っていたことでしょう。イエスは、「ルカ 15:10 一人の罪人が悔い改めるなら、神の御使いたちの前には喜びがあるのです。」と言われていました。ペテロは第一の手紙で、たましいの救いの恵みについて、預言者たちが熱心に調べたと書いていますが、「御使いたちもそれをはっきりと見たいと願っています。(1:12)」と書いています。それで、救われた人々が無数にいるのですから、このように礼拝し、賛美しているのです。

2B 大患難を経てきた者たち 13-17

¹³ すると、長老の一人が私に話しかけて、「この白い衣を身にまとった人たちはだれですか。どこから来たのですか」と言った。¹⁴ そこで私が「私の主よ、あなたこそご存じです」と言うと、長老は私に言った。「この人たちは大きな患難を経てきた者たちで、その衣を洗い、子羊の血で白くしたのです。」

24 人の長老たちの一人が、ヨハネに問いかけました。白い衣を着ている人はだれか、という質問です。けれどもこれは、本当は分からないで尋ねているではありません。ヨハネに、注意を引き寄せるためです。

まず、「大きな患難を経てきた者たち」と長老が言っています。先ほどから申し上げているとおり、教会が天に引き上げられた後も、大患難の中にいる人々にも救いが用意されているのです。しかし、それは神の御怒りがすでに現れている中であり、そこで信じるというとは、そのまま殉教を意味します。

そして、「その衣を洗い、子羊の血で白くしたのです。」と書いています。白い衣は、キリストの血による罪の赦しであり、罪のきよめです。イザヤはこう預言しました。「1:18 「さあ、来たれ。論じ合

おう。——【主】は言われる——たとえ、あなたがたの罪が緋のように赤くても、雪のように白くなる。たとえ、紅のように赤くても、羊の毛のようになる。」

私たちが過ちを犯したときに、償おうとするのですが、行ないによって償おうとします。自分の心の罪意識を、なんとか払拭したいと思うからです。けれどもそれでは、決して拭い去ることはできません。しかし、主イエス・キリストの血であれば、完全に私たちの心をきよめることができます。「ヘブル 9:14 まして、キリストが傷のないご自分を、とこしえの御霊によって神にお献げになったその血は、どれだけ私たちの良心をきよめて死んだ行いから離れさせ、生ける神に仕える者にすることでしょうか。」ですから、彼らは小羊の血によって白くされました。

¹⁵ それゆえ、彼らは神の御座の前であって、昼も夜もその神殿で神に仕えている。御座に着いておられる方も、彼らの上に幕屋を張られる。¹⁶ 彼らは、もはや飢えることも渴くこともなく、太陽もどんな炎熱も、彼らを襲うことはない。¹⁷ 御座の中央におられる子羊が彼らを牧し、いのちの水の泉に導かれる。また、神は彼らの目から 涙をことごとくぬぐい取ってくださる。」

ここは、天における安息を鮮やかに描いている箇所です。天というのは、安息があることをヘブル書の著者は述べています。「ヘブル 4:9-10 したがって、安息日の休みは、神の民のためにまだ残されています。神の安息に入る人は、神がご自分のわざを休まれたように、自分のわざを休むのです。」七つのことが書かれています。

第一に、主の間近に行けるところに安息があります。「神の御座の前」にいとあります。主に近づくと、恵みにあずかります。「マタ 11:28 すべて疲れた人、重荷を負っている人はわたしのもとに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。」

第二に、神に仕えますが、これも安らぎです。「聖所で昼も夜も、神に仕えているのです」とあります。天でありますから、夜があるわけではないのですが、ここは夜の時に眠らなければいけないような、疲れを感じることは、天においてはありません。主に仕える喜びに満ちています。私たちは、地上においてもこの恵みがあります。主に仕える、奉仕する恵みと喜びです。礼拝そのものが、主への奉仕であるし、人々に主にあって仕えることも喜びです。

第三に、交わりにおける安息があります。「彼らの上に幕屋を張られる。」とあります。幕屋というのは、親密さを示しています。イサクが亡き母サラの天幕に、リベカを入れたことが書かれていますが、そのように親しさの中に入ることを意味します。イエスが人となられたのは、私たちの間に幕屋を張られるためであることが、ヨハネ 1章 14節に書いてあります。「ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。」ここの「住まわれた」の直訳が、幕屋を張るという意味です。

第四に、必要が満たされる場所です。「飢えることも渴くこともなく」とあります。彼らは患難の中で飢えて、渴きに襲われていましたが、もはやその苦しみはなくなります。霊的には、私たちキリスト者は飢えも渴きもありません。ここにある、天の豊かさを前もって受け取っているからです。

第五に、守られる場所にある安らぎです。「太陽もどんな炎熱も、彼らを襲うことはない。」とあります。詩篇 121 篇 5-6 節に、同じ約束があります。「【主】はあなたを守る方。【主】はあなたの右手をおおう陰。昼も日があなたを打つことはなく夜も月があなたを打つことはない。」これは荒野の旅をしていたイスラエル人は、切実な問題でした。太陽の灼熱から主は雲で守られ、夜の寒さは火の柱で守られました。大患難において、その後半で獣の住民が太陽の炎熱で焼かれていくという災いがあります。

そして第六に、導かれる場所の安息です。「御座の中央におられる子羊が彼らを牧し、いのちの水の泉に導かれる。」とあります。不案内によって、不安に陥ったり、迷うことはなくなります。詩篇 23 篇にある羊飼いと主の姿ですね。「23:1-3 【主】は私の羊飼いです。私は乏しいことはありません。主は私を緑の牧場に伏させいこいのみぎわに伴われます。主は私のたましいを生き返らせ御名のゆえに私を義の道に導かれます。」そしてヨハネ 10 章の、良き羊飼いのイエスの姿です。

そして、第七の安息は、慰めです。「神は彼らの目から涙をことごとくぬぐい取ってくださる。」とあります。究極の慰めであり、安息です。涙を流した分、慰めの報いが大きいです。「詩 126:5 涙とともに種を蒔く者は喜び叫びながら刈り取る。」

このように、彼らは過酷な患難を経ましたが、永遠の慰めと安息を得ています。私たちは、とにかく、今の安息、今の心地よさを求め、それで他の人たちにも伝道するのがはばかれることがあります。主のみこころを行うなら、反対や迫害、また余計な葛藤が増えるからです。しかし、私たちは、今の生きている肉体が、滅んだ後のことを考えないといけません。今、主の福音のためにいのちを失えば、本当の意味でのいのちを獲得することになるのです。